

近代日本語の「一的」の近代韓国語に おける受容

「一的」の語構成の原理を中心に

金 晞 泳 yuiyu1004@dongduk.ac.kr
同徳女子大学・日本語学科・副教授

Ⅰ Contents Ⅰ

- I.はじめに
- II. 研究の枠組み
- III. 韓国語における日本語の「一的」の受容
 1. 「一的」の語構成の原理
 2. 韓国語と日本語における同一語基を持つ「一的」の有無
 3. 同じ語基を持つが韓国語と日本語において意味が異なる「一的」
- IV. おわりに

이 논문은 2018년도 동덕여자대학교 연구비 지원에 의하여 수행된 것임(연구번호: 201804671).
This study was supported by the Dongduk Women's University grant(No.201804671)

I.はじめに

「一的」は近世末・近代初期において主に翻訳語の影響で使用され始めて、形容詞が乏しい日本語の事情と漢語の高い生産力によってその使用が拡大されたと言われている(藤井(1957)、金晳泳(2011)など)。このような漢語系接尾辞「一的」の使用は明治二〇年代に入ってから急激に増加して(金晳泳:2012、269表三・四)、現代になってはなくてはならないほど多く使われる語になった。その中で、近代日本語における「一的」は、日本に限らず同じ漢字文化圏である韓国にも大きな影響を与えて、近代のみならず現代韓国語にも多く使用されるようになった。

そこで本稿では日本語と韓国語の「一的」の用例を語構成という側面に中心をおいて時期別に対照分析して、「一的」がどのように韓国語に受容されて、どのような変遷を経て今に至ったかに関して考察を行った。

II. 研究の枠組み

1. 先行研究と問題提起

近代韓国語における「一的」の受容に関する研究は今まで多数行われてきたが、まずは宋敏(1985)、鄭英淑(1994)、李仁淳他(2001)、孫在賢(2001)などの研究があげられる。

宋(1985)は、近代韓国語に現れた「一的」の用例を多数あげて初期「一的」の機能と特徴を現代韓国語と比較して考察した。また、近代韓国の知識人による著作や近代日本の翻訳書とその韓国における重訳との関係などを考察して、近代韓国語における「一的」が近代日本語からの借用語であったと述べた。鄭(1994)の場合、近代韓国におけるテキストに現れた「一的」の用例を通時的に調査して、主に「一的」がいつどのように韓国語で使われるようになったかに関して述べた。李(2001)・孫(2001)などは、韓国の新聞の社説や辞書における「一的」の用例を採集して、現代日本語と韓国語における「一的」の語構成と語基の特徴に関して調査を行った。

以上のように、韓国語における「一的」の受容に関して多くの先行研究がすでに行われてきたが、「一的」の韓日対照研究にはいくつかの課題が残っている。今までの研究は、韓国語における「一的」の初出、両言語の「一的」における語基の字数(e.g. 一字漢語、二字漢語など)や語基をともにする「一的」の有無など、現状の報告が中心になっている。管見の限りでは、韓国語の「一的」がどのような語構成の原理を基盤としているのか、また現代韓国語における「一的」の多用の原因とその用法の発生や意味の派生原因はいかなるものであるかなどに関して、近代韓国語を日本語の「一的」の語構成と意味・用法と比較しながら計量的に考察した研究はあまり見られない。

そこで本稿では、近代における両国の「一的」の用法を細かく分類してその用例を対照比較することによって、近代日本語の語構成の原理が韓国語に与えた影響、その意味機能と用法の発生原因などを明らかにした。つまり、近代韓国語において「一的」を受容するに際して当時の韓国人における語構成の原理とその感覚、また同じ漢字文化圏でありながらも同じ語基を持つ「一的」とそうではないものが増えていた背景、最後に同じ語基を持ちながら異なる意味を持つ「一的」が韓国と日本両国語において使用されている理由などに関する根本的な疑問も明らかにした。

2. 調査対象及び分析方法

2.1 調査対象

日本語の場合、まず明治期における幅広いジャンルから多数の文献を選んで調査を行ったが、その主な調査資料は、明治元年から大正5年に至るまでの合計162件のテキストである(詳しくは、金(2011)参照)。また、現代日本語においては『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用した。詳しくは、以下の(1)のようである。

(1) [現代日本語のテキスト]

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』[BCCWJ領域内公開データ(2009年度版のモニター公開データ)]:書籍(約3,000万語)中、書籍OB・白書(約480万語)・Yahoo!知恵袋(約520万語)・国会会議録(約490万語)。

(2) [現代韓国語のテキスト]

- a. 『SJ-RIKS Corpus』(Sejong - Research Institute of Korean Studies):6,115個のフェイトと116,065,151語節, <http://db.koreanstudies.re.kr/index.jsp>
- b. 『韓国史データベース』三国史記、高麗史、朝鮮王朝実録、韓国近現代新聞資料などを収録, <http://db.history.go.kr>
- c. その他近世末・近代テキスト:用例・本文に出典を表記

2.2 分析方法

本稿で扱う「一的」などの用語や概念、また用例の出し方は以下の(3)ようである。

(3) [凡例]

a. 用語

- 1) 「一的」は「語基+的」の語構成を持つ語。e.g. 道德的:道德+的
- 2) 「一的」の「語基+的」のような構造を「一的」の語構成という。
- 3) 「一的」の用法は、統語論的に大きく装定用法、述定用法、その他の三つの用法に分類する。詳しくは、以下の(4)を参照。

b. 例文における表記

- 1) 「一的」:下線
- 2) 「一的」の用法:波下線
- 3) 「一的」の被修飾語:二重下線 e.g. 道德的に完璧な政權
- 4) 韓国語の読みは、上付き文字で横に表記。e.g. 残酷하다^{hada}

本稿では近代日本語の「一的」を時期別に収集して、(3)bで述べたように、統語論的に「装定」「述定」「その他」に分類し、さらに文中での意味機能によって「装定」を「連用用法」「連体用法」に分類し、それぞれの用法を活用別に分類した。それをまとめて、近代・近世末の日本語の「一的」の用例とともにあげると、以下の(4)のようになる(金晞泳:2012b、265p)b。

(4) [近代日本語における「一的」の用法]

a. 装定用法

- 1) 連用用法:㉗二連用用法客観的ニ判断する]
 - ①語幹連用用法比較的早い]
- 2) 連体用法:㉘ナ(ル)連体用法客観的ニ判断
 - ㉘ノ連体用法暫らく學理的の問題を棄置き¹⁾]
 - ①語幹連体用法客観的ニ判断]
 - ②その他の助動詞連体用法獨斷的らしい聲²⁾]
 - ①語幹連体用法客観的ニ判断]

1) 『明治文化全集』一四巻「西洋娘節用」明一九、五六九頁

2) 『明治翻譯文学全集』五巻「滑稽氏」明二五、二八七頁

b. 述定用法

㉓ 語幹述定用法[…革命政府ヲ以テ唯暫時的ト見做テ其永續スベキ³⁾

㉔ その他の助動詞述定用法デムーランハ革命的ニシテ乘權官アル政治ヲ…⁴⁾

c. その他の用法

㉕ 名詞用法他ノ飛散性的ヲ化生スヘキ酸類ハ…⁵⁾

㉖ その他:分類するに至らない用例e.g. 題目・図表など

III. 韓国語における日本語の「一的」の受容

1. 「一的」の語構成の原理

1.1 近世・近代日本語における「一的」

韓国語における日本語の「一的」の受容を述べる前にまず、近世・近代日本語における「一的」の輸入・変遷などを簡単にまとめてから論を進めたい。近世日本語における「一的」は中国俗語文学の影響で成立したが(金喆泳:2011)、当時日本における「一的」の認識は以下の(5)のようであった。

(5) 一的助辭。俗語で、名詞・動詞・形容詞・副詞に添へて用ひる。宋の語録などに低地などを用ひるものに同じ。

a. 形容詞に添へる助辭「もの」。貴的(貴いもの)

b. 接続の助辭「の」。

c. 所有をあらわす助辭「の」。低とも書く。我的書(私の本)

d. 動詞・形容詞を名詞に變ずる助辭。得とも書く。走的快(歩くことが速い)

3) 『仏国革命史・三卷』明九、一〇章・三一頁

4) 『仏国革命史・三卷』明九、八章・五一頁

5) 『化学分析表』明一二(一八七九)

- e. 人をいふ意に用ひる。送信的(郵便配達夫)
- f. 了に同じく過去の時を示す助辭。畢的學(卒業した)
- g. 副詞に添へる助辭「に」。地とも書く。一直的(まっすぐに)
- h. 動詞の下について受身の意をあらわす助辭。兒子死的(子に死なれた)

凡例) 諸橋轍次『大漢和辞典』が説く「一的」の用法

しかし、近世日本において中国俗語文学の「一的」はその解釈が容易ではなかったため、この分かりにくい「一的」の「意味機能」を明らかにするために、以下の(6)のように中国俗語文学の「一的」を訓読・翻訳するに際して「一的」に「仮名」を下接するか、附訓した(「連体用法1 (5)b・c)には“ノ・カ”、(6)a・「副詞用法(連用用法) (5)g)には“ニ”、(6)b・「連体用法2 (5)a・d・e)には“モノ”(6)c)。このような“仮名一ノ・ニ・モノ”は、明治期に至っても同じく「一的」と共に翻訳語に使われ、その事実上の「意味機能」を担うことになり、明治期テキストにおける「一的」の用法の統語論的な基盤になった(金:2011、114-115)。

- (6) a. 不レ別下(イトマゴヒセズ)這些ノ求ルニ詩畫ヲ一的ノ朋友ニ上(一・4・オ)
- b. 把レ被^ヲ(フトン)没頭没腦的ニ(スツボンカブリニ)蓋下ス。(二・9・ウ)
- c. 凡来テ喫^{レスル}酒^ヲ的(モノ)、偶然(タマノ)身邊銀錢缺少、ナルトキハ(二・1・ウ)

『小説三言』(1976):『小説奇言』宝暦3年(1753) 凡例) 左ルビは括弧表記

近世日本語において中国語から受容された「一的」は、その後近世末・近代初になって主に翻訳語の影響で使用され始めて、形容詞が乏しい日本語の事情と漢語の高い生産力によってその使用が拡大された(藤井(1957)、金(2011・2012)など)。その語構成の原理を簡単にまとめると以下の(7)と表1のようになる。

(7) [近世末・近代日本語における「一的」の語構成の原理]

- a. これまで存在していなかった新しい抽象的な概念を漢語名詞を持って翻訳
(System:組織)
- b. 漢語名詞に的を附して、形容詞・形容動詞のような意味・機能を持つ語を派生
(Systematic:組織的)
- c. 翻訳から非翻訳への「一的」の使用拡大による語構成の原理の簡略化:「名詞+的」
- d. 体系的に形容動詞のような用法が確立(名詞:形容詞・形容動詞:副詞)
System:Systematic:Systematically = 組織:組織的(ナ・ナル):組織的ニ
- e. 現代日本語における書き言葉から話し言葉への「一的」の使用拡大:「名詞+的」の深化

上記の(4)のように、明治期における「一的」の装定・連体用法は形式上主に三つの用法(ノ・語幹・ナ)に分けられるが、その「意味機能」においては大きく二つの用法(ノ・ナ)に分けられる。そこで、その基準として考えられるのは、主に程度副詞と共起できるか否かである。また、明治期における「ナ」連体用法は、現代日本語と比べて、その意味範囲は狭かった。しかし、「ナ」連体用法は、主に翻訳語として使われるに際して、先に発達した既存の「ノ」・「語幹」連体用法が表現し切れなかった「相対形容」に使われ、その使用が拡大したと考えられる。一方、「ノ」連体用法は「語幹」連体用法に吸収されていくようになる(金晞泳:2010b、95-96・107)。

〈表 1〉 明治期における「-的」の装定用法の変遷(金:2012a, 37)

「-的」の 用法 時期		装定用法				語形成 の原理
		連体		連用		
明治初期	西洋語の 派生法による影響	ノ連体用法		ニ連用用法		語基の 抽象化
明治中期 以後		名詞 — 形容詞 — 副詞 System — Systematic — Systematically 組織(語基)+的 — 組織(語基)+的+(ナ) — 組織(語基)+的+(ニ)				
明治中期 以後		語幹連体	ナ連体	ニ連用	語幹連用	

1.2 近世・近代韓国語における「-的」

続いて近代韓国語における「-的」の用法であるが、その前にまず韓国語における「(主に)漢語形容詞+하게^{hage}・한^{han}・하다^{hada}」という用法(以下、「漢語形容詞+하다^{hada}」用法)に関して触れてから論を進めたい。

現代を含めて当時近世・近代の韓国語には、「漢語形容詞+하다^{hada}」という用法がすでに存在していて、それは日本語における形容動詞の用法と似通っている。詳しくは以下の(8)のようである。

(8) 近世・近代韓国語における「漢語形容詞+하다^{hada}」の用法

a. 装定用法

1) 連用用法:漢語形容詞+하게^{hage}

e.g. 그가 교섭하면 나보다도 용이하^{hage}게 요구를 관철할 수 있는 생각이 번개같이 나의 머리를 지나친 것이다. 『물』김남천(1933)

⇒ 容易に要求を通せる

2) 連体用法:漢語形容詞+한^{han}

e.g. …… 무식하^{han}달 수도 있는 방분 자유한^{han} 소나타였습니다.

⇒ 放棄自由なソナタ

『광염 소나타』김동인(1929)

b. 述定用法:漢語形容詞+하다^{hada}

e.g. 내 사정일랑은 이루 말할 수 없이 참혹하다^{hacda} 시면서 금점에 실패하신 뒤 가지가지 역참과 화환이 들어서 …… 『대하(大河)』김남천(1939)

⇒ 残酷だと仰い

一方、近世・近代における「一的」の用法には以下のような用例がまず見られる。

(9) [近世・近代における「一的」의 用法 ①]

: 「漢語形容詞+的」+하게^{hage} · 한^{han} · 하다^{hacda} 用法など

⇒ e.g. (眞的) 名 적실한 것, 적확한 것 [-하다形]

『修正增補朝鮮語辭典』(1942)

a. 装定用法

1) 連用用法: 「漢語形容詞+的」+하게^{hage}

e.g. 그것을 簡明 直捷 快活 端的하게^{hage} 삽살이 표현한 記號!

「내가 사랑하고 십흔 朝鮮 七十年前에 單身調査, 獨力創製한 古山子の 大東輿地 圖」

『별건곤』12·13号、六堂學人(1928.05.01)

⇒ 端的に簡単に表現した

2) 連体用法: 「漢語形容詞+的」+한^{han}

e.g. 사람마다 그 말이 진적(眞的)한^{han} 소문인 줄로 여겼더라

⇒ 眞的な噂 『은세계』이인직(1913)

e.g. 위기에로의 발전인 것이오 혼란을 過渡的한^{han} 특징인 것이다.

「민족적 협동 문제」 『삼천리』4卷·7号、陳榮喆(1932.05.15)

⇒ 過渡的な特徴

b. 述定用法: 「漢語形容詞+的」+하다^{hacda}

e.g. 봉단이는 듣고 온 소문이 진적(眞的)한가^{hangga} 알러는 맘이 급하여 ……

⇒ 眞的であるか 『임격정』홍명희(1928-1939)

c. その他の用法: 人或いは物を表す「的」

- e.g. 【김자이지^{kimji-ji}】(金的李的)名 성명이 분명하지 아니한 사람을 셀 때에 쓰는 말
⇒ 名前が不明な人を数える時に使う 『修正増補朝鮮語辭典』(1942)
- e.g. 【가덕치^{gadeok-chi}】(加德的)名 경상남도 가덕도(加德島)에서 만드는 탕건
『修正増補朝鮮語辭典』(1942)
⇒ 韓国・慶尚南道の加德島で作られる特産品である「タンゴン」を言う

以上の用例の中で、まず(9)cのような用例をみると、近代韓国語の「的」が現代の「的」の音読みにあたる「적・덕」ではなく、「地」の音読みである「지・치」であって⁶⁾、その意味機能が「人或いは物を表す名詞」のようであった点、また『修正増補朝鮮語辭典』に収録されている「真的」が名詞だと記述されている点で、中国俗語文学に見られる「一的」をそのまま受け入れた用法が韓国語にも存在していたことが分かる((5)e・(6)c参照)。

また同時に、(9)b・cのように現代日本語・韓国語にも見られる「端的・過渡的」という「一的」が、既に韓国語の中であった(8)の「漢語形容詞+하다^{hada}」用法に適用されて使われていた点から、近代日本語における「一的」が「漢語形容詞」のように認識されて、まず語彙レベルで個別的に韓国語に輸入されたことが分かる。

ちなみに、現代韓国語における「一的」の用法は、宋(1985)と鄭(1994)で述べられたように、(9)とは異なって、「一的+으로^{euoro}・인ⁱⁿ・이다^{ida}」という用法(以下、「一的+이다^{ida}」用法)を見せていて、(9)cのような名詞用法は存在しない。詳しい現代韓国語における「一的」の用法は以下の(10)のようである。

(10) 現代韓国語における「端的・過渡的」+으로^{euoro}・인ⁱⁿ・이다^{ida}

- a. 装定・連用用法: 一的+으로^{euoro}

6) 中国語の「的」は、「… 中国で最初は実詞として使われ、徐々に「低」と「地」を交代して虚辞の用法ができ、その意味と文法範囲が広くなり、近代に至って、俗語文学に主に虚辞として使われるようになった(陳誼 1999:338)」と言われている。また、(5)の「宋の語録などに低・地などを用ひるものと同じ」参照。

e.g. 인위적 물가 억제정책의 폐해가 단적으로^{eu^{ro}} 드러난 순간이다.

⇒ 端的に現れた 『東亜日報社説91』(1991)

b. 述定·連体用法: 一的+인ⁱⁿ

e.g. 막스 회장의 '카운슬링 경영 철학'을 느낄 수 있는 단적인ⁱⁿ 예 하나를 들어보자.

⇒ 端的な例 『朝鮮日報·經濟面』(2002)

c. 述定用法: 一的+이다^{ida}

e.g. …… 그 구성이 불안정하며 과도적이었다^{iot^{ta}}는 사실 ……⁷⁾

⇒ 過渡的だった 『한국사』 강만길 외(1994)

ところが、近代韓国語における「一的」には次のような用法も存在している。

(11) [近世·近代における「一的」の用法 ②]: 現代韓国語の「一的」のような用法

a. 装定用法

1) 連用用法: 「漢語名詞+的」+으로^{eu^{ro}}

e.g. …… 더욱이 소작농민들의 각성을 촉진하여, 조합이 거의 전선적(全鮮的)^{eu^{ro}}으로

총설(叢說) 되었으며 ……

⇒ 全鮮的に叢說されて、期週的に侵略する 『낙조』 김사량(1940)

e.g. 이 고독감은 기주적(期週的)^{eu^{ro}}으로 가분작이 침노를 한다.

⇒ 期週的に侵擄する 『지기미』 김사량(1941)

2) 連体用法: 「漢語名詞+的」+(인)ⁱⁿ

⑦ 인ⁱⁿ連体用法

e.g. 그리하여 농민은 봉건적인ⁱⁿ 것과, 자본주의적인ⁱⁿ 것의 二重的 搾取에 음신하게 된다.

「世界的 經濟恐慌과 朝鮮의 農業恐慌의 展望」 『동광』21、

⇒ 封建的なものと、資本主義的なもの 최상해(1931.05.01)

e.g. 일체의 喧騷는 실로 인간적인ⁱⁿ 것에서 오는 것이오.

7) 이다^{ida}의過去形, 이었다^{iot^{ta}}

⇒ 人間的なものから 「新春文藝叢筆」『삼천리』(1939.01.01)

① 語幹連体用法

e.g. 지금은 최명애의 애인이 된 그 학생은 그의 염복적(豊福的) 눈을 들어 연실이
를 보고 있는 것이었다. 『김연실전』 김동인(1939)

⇒ 豊福的目をあけて

b. 述定用法: 「漢語名詞+的」+이다^{ida}

e.g. 안이 시적이다^{ida}. 감정적이다^{ida}. 「孰是孰非」『개벽』1号、(1920.06.25)

⇒ 詩的だ。 感情的だ。

ここで注目したいことは「一的」の語基が「漢語形容詞」から「漢語名詞」に変化するに伴って、「一的」の用法が「一的+하게^{hage}・한^{han}・하다^{hada}」から「一的+으로^{euro}・인ⁱⁿ・이다^{ida}」へ変化したことである。それは、以下の(12)のように「一的」の意味機能と似通っている「一チック」には「하게^{hage}」が付さされていて、「形容詞+的」には「~하다^{hada}」の用法が、「名詞+的」には「~이다^{ida}」の用法がより自然になっていたことが確認できる。

(12) ニヒリスチック(nihilistic)

e.g. …… 막다른 골목에 처했을 적에 그들이 니힐리스틱하게^{hage} 던져 본 말입니다.

⇒ ニヒリスチックに投げかけてみた 『맥(麥)』 김남천(1941)

つまり、近代韓国語には、(9)のように「一的」を語彙レベルで個別的に輸入して「漢語形容詞+하다^{hada}」という既存の語構成の原理にそのまま適用した初期の「一的」の用法①と、(7)のような近代日本語における「一的」の語構成の原理(漢語名詞+的+活用)を(11)のようにシステムレベルで体系的に受け入れた「漢語名詞+이다^{ida}」といった「一的」の用法②が共存していたことが分かる。

2. 韓国語と日本語における同一語基を持つ「一的」の有無

本節では、同じ語基を持つ「一的」が常に韓国語と日本語において成立しない理由に関してさらに詳しく述べることにする。

III-1節で述べたように、まず「一的」は形容詞が乏しい日本語において今まで日本語になかった新しい概念や文物における抽象的な概念を表すに便利な手段であった。よって「一的」は主に翻訳書において使用が拡大されたことは自然であって、実際の調査結果もそれを裏付けている(金嘯泳:2012b, 266-270)。このような事実は、翻訳に際して必要な特定の意味を持つ語(例えば形容詞・形容動詞)が既に日本語に存在する場合、翻訳にわざわざ新しい「一的」を作り出す必要がまずないという意味にもなる。その結果、「一的」は既存の形容動詞を補う形で使用が拡大されたが、用法における体系的な類似点から「一的」はやがて形容動詞のように認識されるようになったのである。つまり「一的」は以下の(13)のように形容動詞を語基として持つ必要がそもそもなかったのである。もちろんその後、形容動詞を語基として持つ「一的」が現れるが、それに関しては金(2010a, 2012a)と次節を参考にすること。

(13) [日本語における「一的」の語基制約]

a. 形容動詞「必死」

- 1) 必死に—必死な—必死だ
- 2) *必死的に—*必死的な—*必死的だ

b. 形容動詞「異例」

- 1) 異例に—異例な—異例だ
- 2) *異例的に—*異例的な—*異例的だ

一方、近代韓国語の「一的」は、III-1節で述べたように、日本語の「一的」の語形成の原理と用法をシステムレベルで輸入した結果、その後日本語における「一

的」と独自の道を歩くことになる。詳しく言うと、語彙レベルでの個別の「一的」の輸入だけではなく「漢語名詞+的」というシステム(語構成の原理)を主に輸入したことにより、韓国語は日本語よりもっと自由に「一的」を再生産できるようになったのである。条件さえ合えば、いくらでも新しい「一的」を独自に生産することが出来るようになるからである。

また、日本語における形容動詞はそもそも名詞的な性質をもっていて、それを韓国語にすると名詞扱いになるため、日本語の形容動詞は韓国語における「漢語名詞+的」という語構成の原理に当てはめられ易い。それこそが日本語の「一的」には不可能或いは不自然な語基を韓国語の「一的」は語基として持つことが可能になった理由であり、さらに韓国語において「一的」が多く使われるようになった理由でもある。上記の(13)と比べて、以下の(14)のような韓国語における「一的」の用例をみるとそのようなことがより明らかになる。

(14) [韓国語における「一的」の語基制約]

a. 名詞「필사(必死)」

- 1) *必死(으)로^{(eu)ro} - *必死인ⁱⁿ - *必死(이)다^{(i)da}
 2) 必死的으로^{eu-ro} - 必死的인ⁱⁿ - 必死的이다^{ida}

b. 名詞「이례(異例)」

- 1) *異例(으)로^{(eu)ro} - *異例인ⁱⁿ - ?異例(이)다^{(i)da}
 2) 異例적으로^{eu-ro} - 異例的인ⁱⁿ - 異例적이다^{ida}

以上のように、韓国語と日本語の「一的」が常に語基を共にしない理由に関して述べた。しかし、その一方で韓国語と日本語には同じ語基を持つ「一的」であるものの、そのニュアンスが微妙に異なったり意味がまったく異なったりする場合も存在する。その理由に関しては次節で詳しく述べることにする。

3. 同じ語基を持つが韓国語と日本語において意味が異なる「一的」

明治期の日本語のテキストにおける調査によると、「一的」の語基の品詞はいずれも広義で名詞であることが確認できる(以下の(15)参照)。

(15) a. 名詞

- 1) 単位一名詞(○)、名詞句(○)、名詞節(○)、名詞文(○)
- 2) 固有性の有無一普通名詞(○)、固有名詞(○、e.g. ドンキオテ)
- 3) 構成一普通名詞(○)、転成名詞(○)、複合名詞(○)、
一部の形容動詞語幹(○、e.g. 捨てばち)
- 4) 意味一抽象名詞(○)、具体名詞(○)
- 5) 実質・形式一実質体言(○):名詞(○)
形式体言(×):代名詞(×)、数詞(×、e.g. ~世紀)
- 6) 実質的意義の有無一有(○):本名詞(○)
無(×):代名詞(×)、未定名詞(×)、形式名詞(×)

b. 名詞以外

一部の副詞(○、e.g. 徐々、大々)

凡例 1)名詞の低位分類は、その基準によってお互い重なる場合がある。2)○は有、×は無。但し、形式名詞・数詞のように独自で「一的」の語基になれない場合、×に分類した。3) a-5)山田文法、a-6)松下文法。

以上の(15)によると、明治期における「一的」の語基の品詞は、一部の副詞を除くと、全てが名詞であって、それを帰納的に判断すると明治期における「一的」には「名詞+的」という語構成の原理が存在したことが分かる。

また、「的」は語基が持つ多様な属性や性質或いは抽象的な概念の中でいずれか一つに接近し、それを全面に持ち出すことによって、語基を抽象化する機能

を有する。その結果、「一的」は語基にまつわるなんらかの抽象的な意味を持つようになる。本稿では、そのような一連の過程を、「一的」の語基における抽象化とする(表1と(7)参照)。

(16) 名詞の形容動詞語幹+的:自然+的

- a. 背徳的で、意図的で、駆け引きから生じるため、人為的であり、したがって、最初からうまくいく見込みがない。その反対に、徳がもたらす間接的な成功は、完璧に道徳的であると同時に、絶対に自然的である。

:自然的 = 人為ではない

- b. 神秘的な『沈鐘』を書いたハウプトマンは千八百九十九年に自然的な『馭者ヘンセル』を書いてゐる

:自然的 = 自然主義の『馭者ヘンセル』

- c. 都市計画に緑地保全地区を定め、建築等の行為の制限を行い自然的環境の保全を図るとともに…

:自然的 = 自然環境

原(1986:78)の表現を借りると、「一的」はattributeを表し得る語につく傾向がある」とも言えるが、以上の(16)のように、形容動詞語幹の「自然」は的が付くことによって、話者によって選ばれた‘自然’が持つ多様な属性(attribute)・性質・概念の中で一つが抽象化されて「一的」になるのである。つまり、先に「一的」の語基における条件(語構成の原理)としてあげた、品詞が名詞であることに、抽象化できうる属性・性質・概念などを持つことという条件を加えなければならない。それは言い換えると、抽象化するのに適していない語は「一的」の語基として使用し難くなることにもなる。そこで、(15)のような明治期における「一的」の語基の名詞の分類を見ると、そのような点はより明らかになる。明治期において「一的」の語基として現れていない名詞を、区分基準という面で位相は少し異なるが、一応羅列すると「代名詞・数詞・未定名詞・形式名詞」のようになる。

そこでこれらの名詞はいずれも実質的意義を持たず、実質的意義を持つ名詞への間接的な参照であって、抽象化するに適していないことが分かる。よって、明治期では以下の(17)のような「一的」はまず現れなかったと思われるのである。そこでこれらの名詞はいずれも実質的意義を持たず、実質的意義を持つ名詞への間接的な参照であって、抽象化するに適していないことが分かる。よって、明治期では以下の(17)のような「一的」はまず現れなかったと思われるのである。

(17) a. 未定名詞: ど的、だ的

b. 代名詞: これ的、それ的、あれ的

c. 形式名詞: も的、こ的

凡例但し、形式名詞の場合、名詞句、名詞節の場合、現代日本語において見られるが、単独としては見られない。

しかし、同じく代名詞であっても、人称代名詞の場合、立場という具体的な意味を持っていて他の代名詞とは事情が異なる。

以上のように「一的」という語は、語基が持つ多様な属性や性質、抽象的な概念の中でいずれか一つを選んで意味機能を果たす語であって、その意味機能は文脈依存的であり、ある意味では主観的であるとも言える。そのような「一的」の多義性によって、韓国語と日本語における「一的」が例え同じ語基を持つとしても必ずしも同じ意味であるとは言いきれないようになったのである。例えば、韓国語における「前進的」は、以下の(18)aのように、語基である「前進」が持つ多様な意味の中で「前に進む」という行動に見られる肯定的で発展的なイメージが選ばれて「前向き」という意味機能を果たす場合がある。その一方で日本語における「前進的」は、以下の(18)bのように、「前進」が持つ意味の中で「足を使って少しずつ前に進む緻密な行動そのもの」が選ばれて「一步一步積み重ねるような」という意味機能を果たす場合があるのである。

(18) [韓国語と日本語における「前進的」]

a. 韓国語における「前進的」:前進的な姿勢 = 前向きな姿勢e.g. 그래서 남북한의 축구 교환 경기나 음악제 같은 남북 공동의 행사 등은 환영을 받아야 마땅하고 정부의 전진적인 자세는 긍정적으로 평가 받을 수 있다.

『朝鮮日報』社説(90)(1990)

b. 日本語における「前進的」:一步一步積み重ねるような

e.g. 前進的な論証(論progressive probation):前提から一步一步理由を積み重ねて

言って、最後に結論に到達する論証。総合的論証。 『大辞林』(1988)

凡例) a)の用例は稿者によるもの。その他は、李(2001)から一部抜粋。

V. おわりに

本稿では、日本語と韓国語の「一的」の用例を語構成という側面を中心に中心をおいて時期別に対照分析することによって、韓国語の「一的」がどのような語構成の原理を基盤として成立したか、また現代韓国語における「一的」の多用の原因とその用法の発生と意味の派生原因などを明らかにした。その結果、以下のような三点が分かった。

- 1) まず近代韓国語には、中国俗語文学による「一的」の用法、また近代日本語の「一的」を語彙レベルで輸入して「漢語形容詞+하다^{hada}」という既存の語構成の原理にそのまま適用した初期の「一的」の用法①と近代日本語における「一的」の語構成の原理(漢語名詞+的+活用)をシステムレベルで受け入れた「漢語名詞+이다^{ida}」といった「一的」の用法②が共存していた。その後「一的」の用法②の使用が安定・拡大され、現代韓国語における主な「一的」の用法になった。
- 2) 続いて、日本語の「一的」には不可能或いは不自然な語基を韓国語の「一的」は語基として持つことが可能な理由、また韓国語においても「一的」が多く使われるように

なった理由は、まず近代韓国語において近代日本語から語彙レベルで個別の「一的」だけではなく「漢語名詞+的」というシステム(語構成の原理)を主に輸入したことにより、韓国語では日本語よりもっと自由にまた独自に「一的」を再生産できるようになったからである。また、日本語における形容動詞はそもそも名詞的な性質をもっていて、それを韓国語に適用すると名詞扱いになるため、日本語の形容動詞であっても韓国語における「漢語名詞+的」という語構成の原理に当てはめやすいからである。

- 3) 最後に「一的」は、語基が持つ多様な属性や性質、抽象的な概念の中でいずれか一つを選んで意味機能を果たす多義性を持つ語であって、例え同じ語基を持つ「一的」であっても韓国語と日本語において必ず同じ意味であるとは断言できない。

参考文献

- 浅井真慧・深草耕太郎・坂本充(1997)「「的を得た」は的を射ているか~第7回ことばのゆれ全国調査から②~」『放送研究と調査』47(5)、日本放送協会放送文化研究所、pp.52-61.
- 磯邊彌一郎(1906)「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』1巻8号、p5-15、日本近代文学館。
- 浦松佐美太郎(1976)「「的は敵」『言語生活』298号、筑摩書房、p.17.
- 遠藤織枝(1984)「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号、東京大学国語国文学会、p125-138.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
- 金澤裕之(2005)「「一的」の新用法について」『日本語科学』17、国書刊行会、pp91-104.
- 金晞泳(2010a)「「一的」の語基制約」『日本語学研究』27輯、韓国日本語学会、pp.1-13.
- _____(2010b)「連体修飾用法に関する一考察—「A的ノB」「A的B」「A的ナB」形式を中心に—」『日語日文学研究』七三輯、韓国日語日文学会、pp.89-109.
- _____(2010c)「「一的」の連用用法—「比較的」と「可及的・可成的」—、韓国日語日文学会・2010年度秋季国際学術大会、韓国・慶熙大学、2010.10.16.
- _____(2010d)「「一的」の連用用法—「比較的」を中心に—」台湾日本語文學會、於台湾・淡江大學淡水校園、2010.12.18.
- _____(2011)「「一的」の日本語化」『日本語学研究』30輯、韓国日本語学会、pp.105-126.
- _____(2012a)「「一的」の連用修飾用法—「比較的」の語幹連用用法(「一的+ φ 被修飾語」形式)を中心に—」『言語情報』14号、言語情報研究所、pp.31-59.
- _____(2012b)「明治期における「一的」の用法の変遷—連体修飾用法を中心に—」『国語語彙史の研究』31、国語語彙史研究会、和泉書院、pp.261-280.
- 澤野勝巳(2009)「現代日本語における「『何々』的」の使われ方」『国際文化研究所紀要』14、城西大学国際文化研究所、pp.57-78.
- 時衛国(1999)「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—「比較」と「比較的」」『富山大学人文学部紀要』31、富山大学人文学部、pp.239-261.
- 鈴木一彦他(1972)『品詞別 日本文法講座2—名詞・代名詞』明治書院
- 鈴木修次(1978)「「的」の文化」『漢語と日本人』、みすず書房、pp.1-24.
- 宋敏(1985)「派生語形成 依存形態素 “一的”의 始原」『語文論集』Vol.24・25 No.1、安岩語文学会、pp.285-301.
- 孫在賢(2001)「借用接尾辞『的』に関する計量的考察」『翻訳学研究』二巻二号、韓国翻訳学会、pp.129-144.
- 高橋勝忠(2005)「「的」論考」『英文学論叢』49号、京都女子大学英文学会、pp.1-22.
- 車培根(1998)「大朝鮮人日本留學生「親睦會會報」에 관한 研究: 그 創刊趣旨・経緯・内容を 중심으로」『言論情報研究』vol.35、pp.1-56.

- 崔炯龍(2000) 「-적(的)과생어의 의미와 -적(的)의 생산성」 『形態論』2卷2号、形態論、pp.215-237.
- 鄭英淑(1994) 「日本語の接辞、『적(的)』の成立と韓国への輸入問題に関する考察」 『日語日文學研究』25-1, pp. 27-55.
- 南雲千歌(1992) 「現代日本語の「-的」について」 雑誌「中央公論」1992.11月号の場合 『ICU日本語教育研究センター紀要』、国際基督教大学、pp.72-98.
- 日本語教育学会編(2005) 『新版・日本語教育事典』、大修館書店.
- 朴大王(2000) 「接尾辞「-的」について-話し言葉における「-的」を中心に」 『言葉と文化』創刊号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、pp.163-180.
- 原由紀子(1986) 「-的-中国語との比較から」 『日本語学』5卷3号、明治書院、pp.73-80.
- 広田栄太郎(1969) 「-的という語の発生」 『近代訳語考』、東京堂出版、pp.281-303.
- 藤居信雄(1957) 「-的という言葉」 『言語生活』71号、筑摩書房、pp.71-76.
- 藤居信雄(1961) 「-的の意味」 『言語生活』119号、筑摩書房、pp.80-83.
- 堀口和吉(1995) 『「-は-」のはなし』ひつじ書房.
- 前田勇(1960) 『「てきや」という語』 『言語生活』100号、筑摩書房、pp.79-83.
- 丸山千歌(1997) 「英語の接尾辞“-tic”の訳語「-的」について」 『中央公論』1962年11月号の場合 『ICU日本語教育研究センター紀要』、国際基督教大学、pp.15-42.
- 山下喜代(1999) 「字音接尾辞「-的」について」 『日本語研究と日本語教育』、森田良行教授古希記念論文集刊行会、明治書院、pp.24-38.
- 山下喜代(2000) 「漢語系接尾辞の語形成と助詞化-「-的」を中心に」 『日本語学』19卷13号、明治書院、pp.52-64.
- 山田巖(1961) 「発生期における-的ということば」 『言語生活』120、p.56-61、筑摩書房.
- 李長波(2006) 「近世、近代における「-的」の文体史的考察」 『DYNAMIS』10号、京都大学大学院、pp.68-89.
- 李仁淳・大橋敦夫(2001) 「韓国語における「-的」について：日本語「-的」との対照を通して」 『学海』17、上田女子短期大学、pp.63-81.

【データベース類】

- 『太陽コーパス』(2005)雑誌『太陽』(1985-1928)国立国語研究所、CD-ROM
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2009)、国立国語研究所、DVD
- 「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp> (検索日:2019年6月27日)
- 『SJ-RIKS Corpus』(Sejong - Research Institute of Korean Studies)
<http://db.koreanstudies.re.kr/index.jsp> (検索日:2019年6月27日)
- 『韓国史データベース』<http://db.history.go.kr> (検索日:2019年6月27日)

【調査テキスト】

- 内村鑑三(1938)『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店／岡本八潮(2004)「アメリカ合衆国の判例における「宗教概念」の変遷」『創価大学大学院紀要』26、創価大学大学院、pp.89-104.
- 岸田國士(1990)「語られる言葉の美」『岸田國士全集21』、岩波書店／木綿良行(1972)「世界マーケティング戦略における集権管理の実情と問題点」『成城大学経済研究』40、成城大学経済学会、pp.35-56.
- 柴田晃(1983)「精神医学ソーシャル・ワーク実践におけるコンサルテーション機能の一考察」『社会問題研究』32(2)、大阪府立大学社会福祉学部、pp.71-87.
- 須藤葵(2005)「Philippe Pinelの思想再」『新潟青陵大学紀要』5、新潟青陵大学、pp.267-278.
- 望月信幸(2008)「資金管理責任の測定とセグメント貸借対照表に関する研究」『Administration』15(1・2)、熊本県立大学総合管理学会、pp.105-137.

투고일 : 2019. 06. 30.

심사완료일 : 2019. 07. 28.

게재확정일 : 2019. 08. 31.

近代日本語の「一的」の近代韓国語における受容

「一的」の語構成の原理を中心に

｜ 金 晞 泳 ｜

本稿では、日本語と韓国語の「一的」の用例を語構成という側面に中心をおいて時期別に対照分析して近代韓国語における「一的」の受容過程と語構成の原理、また同じ漢字文化圏でありながらも同じ語基を持つ「一的」とそうではないものが同時に増えていた背景などに関して考察を行った。また、同じ語基を持ちながら異なる意味を持つ「一的」が両国語に使用されている理由も明らかにした。その結果を簡単にまとめると、次のようになる。

1) 近代韓国語には、中国俗語文学による「一的」の用法、また近代日本語の「一的」を語彙レベルで輸入して「漢語形容詞+하다hada」という既存の語構成の原理にそのまま適用した初期の「一的」の用法①と、近代日本語における「一的」の語構成の原理(漢語名詞+的+活用)をシステムレベルで受け入れた「漢語名詞+이다ida」といった「一的」の用法②が共存していた。その後「一的」の用法②の使用が安定・拡大され、現代韓国語における主な「一的」の用法になった。

2) 日本語の「一的」には不可能或いは不自然な語基を韓国語の「一的」は語基として持つことが可能な理由、また韓国語においても「一的」が多く使われるようになった理由は、まず近代韓国語には近代日本語から語彙レベルで個別の「一的」だけではなく「漢語名詞+的」というシステム(語構成の原理)が主に輸入されたことにより、韓国語では日本語よりもっと自由にまた独自に「一的」を生産できるようになったからである。また、日本語における形容動詞はそもそも名詞的な性質もっていて、それを韓国語に適用すると名詞扱いになるため、「一的」になり難い日本語の形容動詞であっても韓国語における「漢語名詞+的」という語構

成の原理に当てはめやすかったからである。

3) 「一的」は、語基を持つ多様な属性や性質、抽象的な概念の中でいずれか一つを選んで意味機能を果たす多義性を持つ語であって、例え同じ語基を持つ「一的」であっても韓国語と日本語において必ず同じ意味であるとは断言できない。

・キーワード・

一的, 近代語, 近代漢語, 接尾辞, 語構成, 対照研究

Abstract

Acceptance of the Modern Japanese Chinese Suffix “-Teki (的)” in Modern Korean

The Principle of Word Formation

| Kim, Yu-young |

In this paper, I analyze the principle of the composition of the “-teki (的)” suffix of modern Korean and the composition of the language with a focus on the aspect of the composition of “-teki (的)” in Japanese and Korean. In Japanese and Korean, the suffix “-teki (的)” has different stems. I also examine the background of such a phenomenon in Korean. In addition, Japanese and Korean use the suffix “-teki (的)” with the same stem but with different meanings, and the reason for such a phenomenon is clarified. The results are summarized as follows.

- 1) First of all, the suffix “-teki (的)” in modern Korean language was borrowed from vernacular Chinese literature, and the principle of existing language composition such as “Chinese adjective + hada (하다)” was borrowed from modern Japanese “teki (的)”. Secondly, there is the coexistence of “-teki (的)” such as “Chinese noun + ida (이다)”, which introduces the principle of language composition that modern Japanese had at the system level. However, as the use of “-teki (的)” stabilized and expanded, the latter became the main usage of “-teki (的)” in modern Korean.
- 2) The reason why the word “-teki (的)”, which is impossible or unnatural in Japanese but widely used in Korean, is explained in the following. First, in modern Korean, there is not only the “-teki (的)” of the vocabulary level from modern Japanese, but also the system of “Chinese noun + teki”, which the principle of language construction introduced. Therefore, in Korean, based on

such a language composition system, it became possible to produce “-teki (的)” more freely than in Japanese. In addition, the original Japanese adjectival noun (形容動詞) has a strong noun character because the adjectival noun (形容動詞) of Japanese, which cannot be attached to “-teki (的)”, was easy to apply to the principle of word composition with “Chinese noun + affix” in Korean.

- 3) “-teki (的)” is a versatile lexical item that performs a semantic function by selecting any one of the various attributes, meanings, and abstract concepts of a stem. Therefore, even though the word “-teki (的)” has the same stem, it cannot be asserted that the suffix has the same meaning in both Korean and Japanese.

・ Key Words ・

-teki (的), modern language, modern Chinese, suffix, word-formation method, contrastive study